

続長恨歌訓読考異

矢野, 文博

<https://doi.org/10.15017/12300>

出版情報 : 語文研究. 15, pp.14-25, 1962-12-31. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

続長恨歌訓読考異

矢野文博

前に「長恨歌琵琶行訓読考異」（三重大学「国語国文研究」第三号）と題して、三重大学本を底本とした諸本の異同を示した。その後築島裕氏所写の大東急記念文庫本の白氏文集を見ることが出来たので、その間の事情が一層明らかになった。も一度こゝに諸本を掲げ、引用の便の為にそれ々、番号を附し、序でに遊仙窟の諸本も附記して置く。

- 一、写本 大東急記念文庫蔵本 築島氏によれば、寛喜三年（一二三三）書写並加點、建長四年（一二五三）校合とのことであるが點は兩年次のものが混在してゐる由である。
- 二、写本 三条西公正氏蔵本 正安二年（一一三〇）書写。「文學」（二ノ六）参照。
- 三、写本 三重大学蔵本 享祿四年（一五三一）加點か。
- 四、写本 長恨歌抄（古文真宝）神宮文庫蔵本。成實堂文庫のは文祿二年（一五九三）書写。
- 五、古活字本 後陽成天皇勅板本 慶長十年（一六〇五）以前の刊行。貴重圖書影本刊行会影印本。
- 六、古活字本 神宮文庫蔵本 慶長十五年（一六一〇）以前の刊行。

七、整板本 寛永二十年（一六四三）刊。

八、整板本 長恨歌註 寛永頃。

九、整板本 長恨歌鈔 寛永頃。

醍、遊仙窟 醍醐寺本 康永三年（一三四四）書写。古典保存会影印本。

真、遊仙窟 真福寺本 文和二年（一三五三）書写。貴重古典籍刊行会影印本。

陽、遊仙窟 陽明文庫本 貞和五年（一三四九）書写並加點、嘉慶三年（一三八九）加點並校合。平井秀文氏「陽明文庫本遊仙窟訳文稿」（福岡学芸大学紀要Ⅱ）参照。

曲、謡曲 楊貴妃

扱訓語は中古に広く行はれたものであるが、最初直訳的であったものが次第に意識的となり、反覆してゐる中に訳も洗練されて行つたものと思はれる。特に長恨歌の如く、多くの人々によつて愛誦されて来たものは、その最たるものであらう。少くとも今日見ること

の出来る中世の姿は、そのことを如実に物語つてゐる。その二三を指摘すれば次の通りである。

蓬萊宮中日月長 三蓬萊宮ノ中日月ヲソシ

月日の長く感ずるのは、時間の経過の遅い道理である。この訓が早くからあつたことは、一の本文が「日月遅」とあり、異本の「長」を別記してあることによつても分る。「長」は平声陽韻で、この四句の押韻として絶対であり、平声支韻たる「遅」の替るべくも無いからである。

雪膚花貌参差是 一三シンシトシテシナリニシムシトシテ是

ナリ

これは寧ろ九の様に「シンシタル是レナリ」とでも読むべきであるが、それにしても「参差」の意味が不明であるのも領けない。元来この詩の意味は△顔つきなどからして、どうやら楊貴妃の様だ。▽といふことだらう。然るに訓読の意味する所は、さうではないらしい。それでは当時「参差」をどう考へてゐたかといふことだが、偶々「遊仙窟」に三つの用例がある。

細々腰支参差疑断 真参差とシナヤカ(醒陽タヲヤカ)ニシ

テイタカはタエナムカト疑フ

碧玉縁階参差於鴈函 醒真陽鴈函とキサメルを参差とシナ

ニシ

向來惶惑實畏参差

カシコマル

醒真陽実_ニに参差とカタタカヒナルコトヲ

前の二者は、元来長恨歌と同じ様な意味で△細い腰は抱いたら折れ

さうだ。▽△碧玉の階段は雁が並んでゐる様だ。▽といふことであらう。序でに最後の△無難なことを言つて申訳御座いません。▽の意味であらう。然るに右の訓読は最後の△はまあよいとして、前の二つは間違つてゐる。第一のは「シナヤカ」「タヲヤカ」と解して腰の形容としてしまった。これは「参差」が下に属するといふ、駢文の体を知らなかつたことによる誤解といふべきであらう。これが原因となつて第二も△碧玉が階段を廻らして刻々であるのが優美だ。▽ともいふ様に曲解したのではなからうか。かくして「参差」に「シナヤカ」といふ訓が固定して行く様になり、長恨歌の句も「雪膚花貌」なるが故に優美也との自明の推理によつて、「参差たり」と読んだのであらう。所が「参差」としてシナヤカなりなら分るけれども、「参差」として是れなり」即ち「参差として参差なり」とか「シナヤカにしてシナヤカなり」では意味をなさないので、「シンシトシテシナリ」といふ窮餘の一策を考へたのであらうか。要するにこれは洗練とは餘程縁遠いことではあるが、朗誦しながら自分で分つた様なリズム感に酔つたのではなからうか。「シナリ」の中に、或は「シナヤカ」の意を含ませたのではないかと、考へても見たくないのである。

長恨歌と遊仙窟との関係はこの他にも中々密接であるが、も一つ挙げると、

天上人間會相見 一アメノ上人間にタマ(カサネて)相見

の「天上」「人間」で、遊仙窟にも

天上之靈奇乃人間之妙絶 醒アメノ(ウ)ヘノ靈奇とアヤシクメ

ツラシキヨノナカノ妙絶とタヘニスクレタルナリ

を始めとして四箇處に出てゐる。両者は必ず対句をなしてゐる。意味は「天上」は仙界であり、「人間」は俗世であつて、長恨歌の場合も亦その例に洩れないのである。

意識するに當つては、漢文法を無視した方が日本語としてはよく分ることが多い。従つて訓読はその点自由である。

不見玉顔空死處 一玉ノ顔ヲモ見。エ。不空死たる処ノミアリ

不見長安見塵霧 一長安をミ。エ。不して塵霧ヲノミ見ユ

侍兒扶起嬌無力 三ヲモリヒトニ。タスケケ。コサレテコヒテ力無

春寒賜浴華清池 一春寒で浴を華清の池に賜ハル

落葉滿階紅不掃 一落葉階に滿紅をハラハ不

對此如何不淚垂 二此ニムカツテイカテカ涙ヲトサ。不ム。

最後の「不淚垂」は「一淚垂レ不ム」の方が忠実であるが、「垂る」に當る日本語は「流つ」か「流る」である。然し「落す」か「流す」の方が日本的な表現と言へる。そこで「二ヲトサ不ム」と読むのはよいとして、この他動詞表現から、遂に二は逆に「不垂涙」と改変するに至つたのである。勿論「垂」は平声支韻でこの四句の通韻であるから、去声寘韻の「涙」では詩語を成さぬのである。

梨花一枝春帶雨 三梨花一枝春。ノ雨ヲ帶フ

この「ノ」は提示格乃至中止格と取れないことはないが、寧ろ所有格として「春雨」の意とすべきであらう。破格の古体と見ることが出来る。

その他意識として注意すべきものを挙げれば、「三日タケテ(日高)」「二ニイト短クシテ(苦短)」「三アマツリコトシ玉ハス

(不早朝)」「三看ルニアキタラ不(看不足)」「一三夢ニタモ入ラス(不入夢)」「一閑暇無に(無閑暇)」「二泥土ノ中チニ(泥土中)」等がある。又「三凝レルアフラ(凝脂)」位でよいと思ふが、もつと意識して「三ハタヘ」とすれば、意味は正確になるとしても、訓読としては離れ過ぎる嫌もあらう。

「自(不自棄)」の訓は難しいと見えて、「ミヅカラ」が「二六七八九の殆ど全部であつて、「オノヅカラ」は三と一の別訓があるだけである。序でながら「鈿合」はカンザシか香箱か訓読では明らかでないが、ピンの様な髪飾といふ説(新釈源氏物語)に近い様にはれる。「三ピンヅラ」は「ミヅラ」の音便で、元結髪の名であつたのが後に髪意になつたのであるが、「一ミヅラ」とあるのは髪意でも言つたものと見える。

又音便は詠歎の意を助けるのに力がある様である。

梨園弟子白髮新 三梨園ノ弟子モ白髮新ナリ

椒房阿監青娥老 三セウ房ノアツカン青娥老インタリ

「老インタリ」は「老いなり」の音便ではなく、「ん」の添加であらう。眞の「飽キンタリ」や「小鍛治」(謡曲)の「失せてんげり」の例がある。最後に字音であるが、二が厳密に漢音を指摘してゐる様に、原則としては漢音であらう。「一テムカフ(鈿合)」「一ビヤツ(未央)」「六七ハク(百)」など。但し「二イチジン(一人)」「二サンセンジン(三千人)」は呉音「ニン」であらう。二も「男」は例外的に「ナム」を取つてゐるのは、呉音が圧倒的だつたのだらう。又熟語の場合前の字音が(n)や(u)で終れば連濁となつたであらう。例へばキンデン(金鈿)」「サウゼン(三千)」「

「セウバウ(椒房)」「ハウジ(方士)」など。その他二が「テンシャウ(天上)シンカン(人間)」と読んでゐるのは、仏教用語としてではなく老荘用語であるからであらう。

以上が訓読に於ける中世的性格であるが、訓読には定訓といふべきものは有り得ないであらう。今、長恨歌の全文に就いて本文を校正し、中世的典型とも考へられる訓読を試みに施して、その依る所を明確にして置くことにする。

漢皇重色思傾國

漢皇色を重んじて、傾國を思ひ(八カンクワウ)

御宇多年求不得

天の下治すこと久しく、求むれども得給はず(一アメノシタシロシメス多年ニクニシロシメスコト、トシヲホケレト(多クノトシ)三アメカシタ(ミカト)ヒサシク求トモ得玉ハ不)

楊家有女初长成

楊家に女あり、初めて人と成れり(七ヤウカ三女メ一長成セリ、ヒ(トトナ)レリニヒトナレリ曲ムスメ)

養在深窓人未識(二三曲窓)

養はれて深窓に在つて、人未だ知らず(三養テハヤシナハレテ

二深サウ)

天生麗質難自棄

天の生せる麗しき姿は、自ら捨て難し(一天のナセル麗質を麗キスカタナレハ)自二麗ハシキスカタ(カタチ)ナレハ(レイシツハ)自)

一朝選在君王側

一朝に選ばれて、君主の側(カタハラ)に在つて(一朝に三一朝ニ選レテ君主ノ側ラニ在テ(リ))

一 廻眸一笑百媚生(二三眸二一笑)

眸(マナジリ)を廻して一度笑めば、百の媚生(モモコ) (二眸、一エメハ六一ヒ笑ハ廻百媚(モモ)ノコヒ三モモノコヒナル(生ス・ナレリ)醒生一ナル・ナス)

六宮粉黛無顏色

六宮の粉黛は顏色無し(七リツキウノフンタイ一粉黛ハ)

春寒賜浴華清池

春寒うして、浴を華清の池に賜はる(一春寒て浴を華清の池に賜ハル三春寒シテハ浴ヲ花清ノ池ニ賜フ)

溫泉水滑洗凝脂

溫泉水滑かにして、凝れる脂を洗ふ(二ゼムを洗(凝タル脂)をスヅク)三凝レルアフラ(ハタへ)を洗フ)

侍兒扶起嬌無力

侍兒に助け起されて、媚びて力無し(一侍兒(ワラへ)、嬌(コヒ)て二侍兒三ヨモリヒト(ヨトド)ニタスケヲココサレテ)

始是新承恩沢時

始めて是れ、新に恩沢を承けし時なり(一恩タクを承シ時なり二恩沢ヲ承マハル時ナリ)

雲鬢花顏金步搖(二三搖)

雲の鬢(ツツ)花の顔(カバセ)金のかんざしあり(三雲ノヒンツラ花ノ顔セ金ノ步搖(サシクシ)アリ七花ノカホバセ一步搖(カムガ

シ) 曲雲の鬢づら花の顔はせ)

芙蓉帳暖度春宵

芙蓉の帳暖かにして、春の宵を度る(真帳一カタヒラニ春ノヨロ度ル(スク)三春ノヨロヲ度リ(傳)宵ヨハ)

春宵苦短日高起

春の宵はいと短うして、日高けて起き(一イト短て(ナケキ)ニイト短クンテ(レハ)三春ノヨロハ短ニ苦テ(イトトミシカキニ)日タケテ起キ(ク))

從此君王不早朝

此れ従り君王、朝政し給はず(一アサマツリコトシアサマツリコトシ王ハス)

承歡侍宴無閑暇

歡を承け宴に侍つて、暇無きに(三宴ニ侍シテ(サカモリニハシヘツテ)閑暇、無(イトマナキ)一閑暇無に)

春從春遊夜專夜

春は春の遊に従ひ、夜は夜を専らにす(三夜ヲ專ニス七夜ヲモツハラニス(ホシイママニス))

漢宮佳麗三千人

漢宮の佳麗、三千人(一七カレイ(カタチヒト)ニカタチヒト)

三千寵愛在一身

三千の寵愛は、一身に在り(一テウ愛三寵愛(イトヲシミ)ハ一身ニ在リ)

金屋粧成嬌侍夜

金屋に粧成つて、媚びて夜に侍り(一金屋に粧成て嬌て夜

を侍へり三金屋ヨソヨヒ成テ嬌テヨワニ侍ヘル(リ))

玉楼宴罷醉和春

玉楼に宴罷んで、酔うて春に和す(一二玉楼に三玉楼サカ

モリ罷テ酔テ春ニ和スニ七春ニクワス)

姊妹弟兄皆列土

姊妹弟兄皆列土せり(一二列土セリ(土ヲ列セリ))

可憐光彩生門戶

可憐光彩の門戸に生れることを(二アハレム可シ一門戸に生ル(レルコト)三門戸ニ生スルコトヲ(ナレルコトヲ))

遂令天下父母心

遂に天が下の父母の心をして(一二七天下ヲメカ下ノ父母ノ心ヲシテ)

不重生男重生女

男を生むことを重んぜずして、女を生むことを重んぜしむ(二男ナム。女一(傳)女三男ヲ生ムコトヲ重ンセ(タツトハ)ス女ヲ生ムコトヲ重セ令

驪宮高處入青雲

驪宮の高き処、青雲に入れり(二七リ宮三驪宮ノ高キ処青雲ニ入ル一入レリ二入ル(レリ))

仙樂風飄處處聞

仙樂風に飄つて、処々に聞ゆ(三仙カク風ニヒルカヘツテ処々ニ聞クニヒルカエテ(ベウシテ)一二聞ユ)

緩歌慢舞凝絲竹

緩く歌ひ緩く舞つて、糸竹を凝す(三緩クウタイミタリニ(ミタ

リカハシク舞シテ一ユルクマツテ二カロク（ミタシカワシク）舞テ一疑す

盡日君王看不足

終日君主、看るに飽き足らず（醒終日一ヒネモス竟日一ヒメモス真竟日一ヒネモス三ヒメモソ六ヒメモス八ヒメモス七ヒメモス一見ことアキ不二看トモ足キタラ不三看ルニアキタラ不）

漁陽鼙鼓動地來

漁陽の鼙鼓、地を動つて來る（一フリツ、ミ地を動（ユルイ・ウ・ユス・トヨム）て米ルニハイコ（フリツツミ）地ヲユステ三漁陽ノヲシツツミ地ヲ動シ來ル）

驚破霓裳羽衣曲

そそや、霓裳の羽衣の曲を（一ソソヤ霓裳の羽衣の曲ヲニソソヤ七ケイハス（ソゾヤ・スハヤ・ソヨヤ）ゲイシヤウ三ソヨヤ曲そよや）

九重城闕煙塵生

九重の城闕に、煙塵生る（一九重の城闕に煙塵ナル）

千乘萬騎西南行

千乘萬騎、西南に走る（三西南ニワシル（行ク））

翠華搖搖行復止

翠華揺々として、行いて復止る（二行て復トマル三行テ復止ム（ル）六七ユイテマタトドマル）

西出都門百餘里

西の方、都門を出づること百餘里（一西のか（た）都門を出こと六ハク（ヒヤク）七ハク餘里）

六軍不發無奈何

六軍發らず、何言ふこと無し（六リク（ロク）一發（ら）不、那云こと無ニイカムトイフコト無シ三六軍發セス奈何トモスルコト無シテ）

宛轉蛾眉馬前死

宛轉たる蛾眉は、馬の前に死んぬ（三宛轉タル（メクリメクル）蛾眉二蛾眉ハ馬ノ前ニ死ヌ一馬ノ前に死ぬ醒知ヌ）

花鈿委地無人收

花の鈿地に捨て、人の収むること無し（一花ノカムサシニキシテ（ヲチテ・ステテ）三花ノカンサシ地ニステテ人ノ収ルコト無シ）

翠翹金雀玉搔頭

翠翹金雀、玉の搔頭（二翠翹。金。雀。玉ノ搔頭。一搔頭三玉ノサウトウ（サシクシ）アリ）

君王掩眼救不得

君王眼を掩うて、助くること得給はず（六七タスクルコトエ王ハズ一眼（面）をヲホテ救こと）

迴看血相和流

廻看血相和流（二廻看涙血）

迴看血相和流

迴し看るに、涙と血と相和して流る（一涙ト血トノ相和テ流を看ル二廻テ看レハ（メクラシミルニ）涙血ト（クエツルイ）相クワシテ流ル三血ノ涙相和シテ流ル六血ノ涙（血ト涙ト）陽涕血流襟一ナシタとチとコロモノグヒに流ル）

黃埃散漫風蕭索

黃埃散漫として、風蕭索たり（一黃埃（チレ）散漫と（し）

黃埃散漫風蕭索

黃埃散漫として、風蕭索たり（一黃埃（チレ）散漫と（し）

黃埃散漫風蕭索

黃埃散漫として、風蕭索たり（一黃埃（チレ）散漫と（し）

黃埃散漫風蕭索

黃埃散漫として、風蕭索たり（一黃埃（チレ）散漫と（し）

て風蕭索たり三黄アイ(ツチクレ)七セウサクタリ)
雲 棧榮カハシメ登劍閣(二二廻)

雲の棧 廻り廻つて、劍閣に登る(二二雲ノカケハシメグリ
メグリテ(メグツテ))

蛾眉山上少行人(二蛾眉三山上二行人)
蛾眉の山の上に、行く人少し(二蛾眉ノ山ノ上ニ行く人スクナ

旌旗無光口色薄
旌旗光無うして、日の色薄し(二二日ノイロ)

蜀江水碧蜀山青
蜀の江水、碧にして、蜀の山青し(一蜀ノ江水碧に蜀の山青二

六蜀ノ江水碧ニシテ)
聖主朝朝暮暮情
聖主、朝な夕な(ココロ)の情(三聖主朝ナクユウナクノ情

(ココロ)醒朝ターアサナ(六七ココロ醒情ココロ・ト
サケ)

行宮見月傷心色
行宮に月を見れば、心を傷しむる色あり(一見レハ二見ハ(テ)

六見テハ三見テモ(レハ)心ヲ傷ムル色アリ七イタマシムルイ
ロ)

夜雨聞猿断腸聲(二二聞)
夜の雨に猿を聞けば、腸を断つ聲あり(一夜の雨に猿を聞は

二聞ハ(テ)三夜ノ雨ニ猿ヲ聴テ腸ヲ断ツ声アリ)
天旋日轉回龍馭(二二日轉)

天旋り日廻つて、龍馭を回す(二天メクリ日メク(ツ)て龍
馭を廻すニ七龍ギヨをカヘス(メグラス))

到此躊躇不能去
此に到つて躊躇して、去ること能はず(七チウチヨ(タチモト

馬嵬坡下泥土中
馬嵬の坡の下、泥土の中に(二馬嵬ノツツミノモト泥土ノ

中チニ一泥土の中に三ツ、ミノモト泥土ノウチ)
不見玉顏空死處
玉の顔も見えず、空しく死したる処のみあり(一玉ノ顔ヲモ

見エ不空死たる處ノミアリニ死スル処ノミアリ三玉顔ヲミ不シ
テ空クキユル(死スル)処アリ)

君臣相顧盡霑衣
君臣相顧みて、尽くに衣を霑す(二三尺ニ六尺ニ(ク))

東望都門信馬歸
東の方都門を望みて、馬に信せて帰る(一東のか都門を望

て馬にマカセテ六ヒンガシノカタ三東ノ方都門ニ望テ)

歸米池苑皆依舊
歸り来れば、池も苑も皆旧きに依れり(一歸米レハ(レルニ)

池モ苑モ皆舊ニ依ハリニフルキニ依レリ三池エン皆旧キニ依ル

太液芙蓉未央柳
太液の芙蓉、未央の柳(一未央ニ。未央。柳曲ビヨオ)

芙蓉如面柳如眉

芙蓉は面の如く、柳は眉の如し〔三芙蓉八面ノ如柳八眉ノ如シ
醒真陽面一カホ〕

對此如何不淚垂

此に對つて、如何でか涙落さざらむ〔一此に對テ如何シテカ涙
垂レ不ムニイカテカ涙ヲトサ不ム三如何ノ涙ヲナカサ不シ〕
トサ不ランヤ〕

春風桃李花開日〔一二三四〕

春の風に、桃李の花の開くる日〔二春ノ風ニ桃李ノ花ノ開クル
日七開クル〕

秋雨梧桐葉落時〔一三五雨〕

秋雨の雨に、梧桐の葉の落つる時〔一秋雨の雨に梧桐の葉の落時〕

西宮南内多秋草〔一二三内〕

西宮の南内に秋の草多し〔一西宮の南内に秋の草多シ二南内〕

落葉滿階紅不掃

落葉階に滿ちて、紅を掃はず〔一階に滿紅をハラハ不二
階〔二ハ〕ニ滿テ紅シテ三階ニ滿テ紅ナレトモ掃不〕

梨園弟子白髮新

梨園の弟子も、白髮新なり〔三梨園ノ弟子モ白髮新ナリ〕

椒房阿監青娥老

椒房の阿監、青娥老いんたり〔二椒房。阿監。青娥。老
一老たり三セウ房ノアツカン青娥老イんたりハアクカンヲイン
タリ〔ヲトロフ〕真向來眼飽一イマシ眼にアキンタリ〕

夕殿螢飛思悄然

夕殿に螢飛んで、思悄然たり〔三夕殿ニ螢ル飛テ思イ悄然
タリ〕

秋燈挑盡未能眠〔一二秋〕

秋の燈火挑げ尽して、未だ眠ること能はず〔一秋の燈一二眠
コト能不〕

遲遲鐘漏初長夜

耿耿星河欲曙天

耿耿たる星河の、明けなんとする天〔一星河の曙とする天三カ
ウノタル星河ノアケント欲ルソラ六七アケナント欲スル醒氣
欲断絶一氣絶ヘナムと〔ス〕ルニ日將夕一日クレナムトす〔る〕
に〕

鴛鴦瓦冷霜花重

鴛鴦の瓦冷やかにして、霜の花重し〔二鴛鴦ノ瓦冷シテ三鴛
鴦カハラヒヤカニシテ霜花重シ一霜の花〕

舊枕故衾誰與共〔一二舊枕故衾〕

古き枕古き衾、誰と共にかせん〔二旧ルキ枕故キ衾誰ト共セ
ン三翳翠フスマ寒シテ誰トカ共ニセン六サムウシテ誰ト与ニカ
トモニセン〔タレトカトモニセン〕醒鴛鴦ノ被〕

悠悠生死別經年

悠悠たる生死、別れて年を経たり〔二イウノタル生死別テ年
ヲヘタリ〕

魂魄不曾來入夢

魂魄は曾て来つて、夢にだも入らず〔二魂魄ハ曾て来テ夢タモ
入ラ不^レ一三夢ニタモ醒一錢不直^一一錢ニタモアタラシ〕

臨 印道士鴻都客〔二三方士〕

臨 印の道士、鴻都の客〔二臨クホヨウノ方士コウトノ客六
臨ケウノダウジコウドノカク〕

能以精誠致魂魄〔二二誠〕

能く精誠を以て、魂魄を致す〔二二精。誠。一^二七イタス三致シ
ム〕

為感君王展轉思

君王の展転の思に、感ぜしめんが為に〔二君王ノ展転ノ思ヲ感シ
メンカ為^ニ一展転の思に感か為〕

遂教方士慰勸寛

遂に方士をして、慰勸に求めしむ〔一方士を教てネムコロニモツ
ム^レ慰勸^一ネムコロ曲ホオジ〕

排空馭氣奔如電〔二二三空〕

空を押開き氣に馭して、走ること雷の如し〔一ソラをヒラキ
イナツマ
氣に二空ヲラシヒラキ氣ヲサメテ三風ニ排シ〔ヒラキ〕氣ニ
馭シテハシルコト雷ノ如^ニ二電〔イナツマ〕陽鶴影排空宛^一鶴の
影空をオシヒライテ奔す^レ醒排天之矯鳳^一天をヲシヒライテアカ
ル〔ノホレル〕鳳〕

昇天入地求之遍〔二二五遍〕

天に昇り地に入りて、之を求むること遍し〔一地に^{アマホ}入テ三地
ニ入り之ヲ求ムルコト偏シ^一二アマネシ〕

上窮碧落下黄泉

上は天つ空を窮め、下は夜見国までにす〔一上は碧落をキハメ
下は黄泉〔テ〕ニス三上ハ碧落〔アマツソラマテ〕窮メ下ハ黄
泉〔ヨモツクニマテス〕

兩處茫茫皆不見

二つの処茫茫として、皆見えず〔二兩の處三フタ処ロ茫々トシ
テ皆見ヘ^レ不七兩処〔イツクモ〕

忽聞海上有仙山

忽ちに海上に仙山有り^{ザン}と聞く〔一忽に海上に仙山有と聞二
海。上ニ仙。山。有リト〔コトヲ〕聞ク〕

山在虚無縹渺間〔二二渺〕

山は虚無の渺渺たる間に在り〔一虚無の縹渺間三山ハ虚ヲ縹
渺タル間ニ在リ二虚。無。ノ。縹。渺ノ間〕

楼殿玲瓏五雲起

楼殿玲瓏として五雲起れり〔二楼殿レイリヨウトシテ五雲ヲ
コレリ六レイロウ〕

其上綽約多仙子

其の上に綽約として仙の童多し〔二ニヤクヤクトシテ仙ノ
ワラヘ〔コワラヘ〕多シ三シヤク約〕

中有一人名玉妃〔二二名玉妃 曲玉妃〕

中^{イチニン}に一人の有り、名は玉妃といふ〔一中に一人の有玉妃と名
二名は玉妃ト云二一人。六一チニン〕

雪膚花貌参差是

雪の膚花の貌、参差として是なり〔一雪のハタヘ花のカヲ

シムシとして(タル)シなり二花ノカタチ(カホ)シムシトシ
テ是ナリ三花ノ貌チ(カンハセ)シシトシテシナリ醒容貌一
カホハセ醒陽參差タヲヤカ・シナ(真參差)シナヤカ・シ
ナ(ナ)シ

金剛西廂叩玉扇

金剛の西の廂に、玉の扇を叩く(一金剛の西廂に玉のトホ
ソ(トサシ)を叩ク三ニシノヒサシ)

轉教小玉報變成

うたた小玉をして、變成に報ぜしむ(三ウタタ小玉をして變成
ヲ報セ教ニサウセイに報セシム一變成(フタカタ)に報セシム)

聞導漢家天子使(二書)

渾家の天子の使なりといふことを聞いて(三漢家ノ天子ノ使ト
道コトヲ聞テ)一イフナラク漢家の天子の使なりと六ツカイナ
リトイフコトヲ聞(キクナラク)醒忽然聞導別(忽然トタチマ
チニシテ別をイフヲ聞クニ)

九華帳裏夢魂驚

九華の帳の裏に、夢魂驚く(三九花ノ帳ノ裡ニボウ魂驚
ク一傳)。夢魂。ホウコム)

攬衣推枕起徘徊

衣を搔、整ひ枕を押除けて、起つて徘徊す(一衣をトリ枕を推
テ二衣ヲカヒツクロイ(トリ)三衣ヲカキヨサメ(カカケ)枕
ヲヨシノケテ(推テ)起テ徘徊ス)

珠箔銀屏麗迤開

珠の箔銀の屏、麗迤として開きたり(三珠箔(珠ノスタレ)銀

屏(銀ノ屏)リイトシテ開ク一レイ井として開たりニリイウト
シ(リヒトシテ)開タリ曲タマのスタレ)

雲鬢半偏新睡覺(二二偏)

雲の鬢、半は乱れて、新に睡覺めたり(一雲ミツラ一新ナ
ル睡サメタリ三雲ノ鬢ヲ半ハ編レテ新ニ睡リ覚ム二半ハミタシ
テ睡リ覚タリ(ヌ))

花冠不整下堂來

花の冠、整はずして、堂より下りて來る(三花ノ冠リトト
ノ(不)シテ堂ヲ(ヨリ)下リ來ル二花ノカムサシソクロワスシ
テ一堂よりオ(リ)て來醒下床起(庄ヨリ)起テ)

風吹仙袂飄飄拳(二飄飄)

風、仙の袖を吹いて、飄飄として拳る(二二仙ノソテ三飄々
トシテ拳ル)

似猶霓裳羽衣舞

猶霓裳羽衣の舞に似たり(九ケイシヤウウイニ霓。裳。)

玉容寂寞淚瀾干

玉の容寂寞として、淚瀾干たり(一玉のカホ三玉ノ容チ
寂寞トシテ淚瀾干タリ醒花容(花ノカタチ)曲セキバク)

梨花一枝春帶雨

梨花一枝、春の雨を帯びたり(三春ノ雨ヲ帶フ二ヲビタリ)

含情凝睇謝君王

情、を含み睇、を凝して、君王に謝せしむらく(三情(ココ
ロサシ)ヲ含ミマナシリヲ凝シテ君王ヲ謝ス一睇をコラシテ君
王に謝セシムラク)

一別音容兩渺茫（ハ一二五抄）

一度別れてより、音と容と兩つながら渺茫たり（三一七別レテ）（テヨリ）ヲトツレカタチ（イントヨウト）兩ラ渺茫タリ一別して音容フタツナカラニ一ヒ音容ニ（ヨ）別レテ兩カラ渺茫。タリ）

昭陽殿裏恩愛絶

昭陽殿の裏に、恩愛尽きぬ（一昭陽殿のウチに恩愛ツキヌ真恩ウツクシヒ醒真陽愛色一ウツクシケルナル色）

蓬萊宮中日月長

蓬萊宮の中に、日月遅し（三蓬萊宮ノ中日月ヨソシニ蓬萊宮ノ中日月。遅シ）

廻頭下視人寰處（ハ二廻・視）

頭を廻して、人寰の処を下し視れば（三頭ヲ回シテモ人寰（ウキヨ）ノ処ヲ望ハ二下シ視レハ（ル）

不見長安見塵霧

長安見えすして、塵霧のみ見ゆ（一長安をミエ不して塵霧ヲノミ見ユ二長安ヲ見不シテ塵霧ノミ見ル）

空將舊物表深情（ハ二二空）

空しく旧き物を將て、深き情を表はす（一旧物をトリて深情ナサケをアラハス二六情ケ（ロ）

鈿合金釵寄將去

鈿合金釵、寄將將て去らしむ（一傳）鈿合。二金シヤ三寄セ將テ去シム（ヌ）二寄セ將テ去ル（シム）

叙留一股合一扇

叙留は一股を留め、合は一扇（醒白王に一白玉ノカンサシ六一ツコ）

叙摩黄金合分鈿

鈿は黄金を摩（合は鈿を分テリ）一カンサシハ黄金をツムサキ合は鈿を分テリ二黄金ヲツムサイテ（サキ）合ハ。鈿ヲワカテシム）

但令心似金鈿堅

但心をして、金鈿の堅きに似たらしむ（三但心ヲシテ金鈿ノ堅キニ似セ（タラ）令ムニ似タラシム）

天上人間會相見

天上人間會相見（一アメノ上人間に會々（カサネ）て相見二天。上人。間ニタマノ相ヒ見ム（ル）三天上人間タマノ（カナラス）相見ル醒天上ノアメノ（ウ）へ、人間一ヨノナカ）

臨別慙慙重寄詞

別れに臨んで、慙慙に重ねて詞を寄す（一別にノソテネムコロに重テ二臨テハ三詞ハヨ寄ス）

詞中有誓兩心知

詞の中に、誓ひ有ゆき、二人の心のみ知れり（三詞ノ中ニ誓イ有リ兩タリノ心ノミ知ルニ誓ヒアリキ兩ツノ心ノミ知レリ）

七月七日長生殿

七月七日の長生殿に（一七月七日ノ長生殿に六セツクハツ七チ日チ長生殿ニシテ二七月。七日。長生殿ニ）

七月七日長生殿

夜半無人私語時

夜半ヨナカに人無くして、私ササメゴト語せし時ハ醒夜半ヨナカ・ヨナカ

六ヤハン一人無してサ、ヤキコトセシ時ニササメコトセシ時曲

さゝめごと

在天願作比翼鳥

天に在ナつては願はくは、比翼の鳥と作ナらんハ一天に在は願は比翼の鳥タラム二願ハナリ比ヨクノ鳥ト作ム

在地願為連理枝

地に在ナつては願はくは、連理の枝と為ナらんハ一地に在は願は連理の枝タラムニト為ラン

天長地久有時盡

天長く地久しき、時に尽ルること有りとハ一天長く地久しき時に盡こと有とモ二天ノ長く地久しキクシテ時ヲ尽ルコト有トモ三時有テ尽レトモハ尽ルコト有リトモ

此恨綿綿無絕期

此の恨は綿々として、絶ゆる時無キむハ一恨はメムクとして、絶期無ムニタユルコ無ケム三タユルトキ無ン

一昭和三七・九・二五